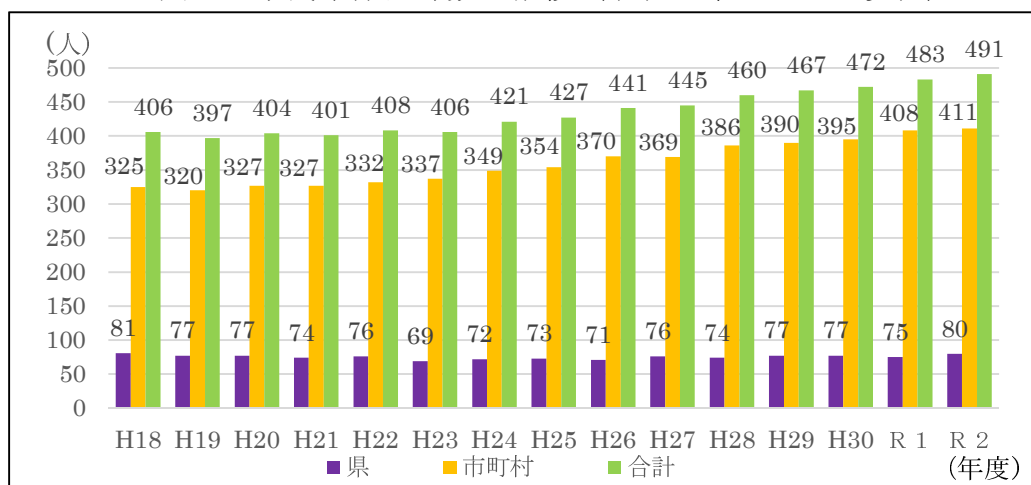


### 3. 奈良県内保健師の現状と課題

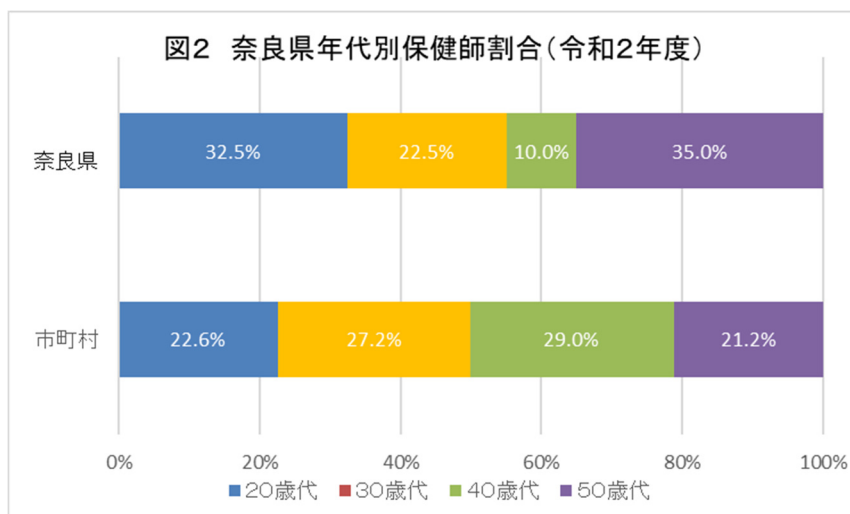
#### (1) 保健師の現状

- ・保健師数は2020年（令和2年）4月1日現在、県保健師80人、市町村保健師411人、合計491人である。（図1）
- ・市町村における保健師数の推移は、過去10年間でみると平成22年度332人、令和2年度411人と79人の増加（増加率23.8%）である。（図1）
- 人口1,000人未満の小規模な自治体があり、保健師が1～2名という状況である。
- ・県における保健師数は、過去10年を見ると、おおむね70～80人で推移している。

図1 奈良県保健師数の推移（令和2年4月1日現在）



- ・年代別構成は、県では、20歳代26人（構成割合32.5%）、30歳代18人（構成割合22.5%）、50歳代28人（構成割合35.0%）と合わせると全体の90%を占め、40歳代8人（構成割合10.0%）と極端に少なくなっている。（図2）
- ・市町村では、各年代の偏りが少なく年代別構成率が、21.2～29.0%となっている。県と比較すると年齢層は均一化している。（図2）
- ・新規採用については、県保健師は13年間（平成9～21年度）のうち、採用のあった年度が2年間はあったが、新規採用が控えられ、平成22年度から採用が復活した。そのため採用10年未満が全体の50%を超えている。



## (2) 保健師の課題

### ① 県の課題

- ・平成9年度から平成21年度保健師の採用がなかったため、中堅期の保健師が少ない。
- ・平成9年より地区分担制から業務分担制になったため、業務中心の保健活動になり、地域全体を視野にいたした活動が展開しにくくなった。

### ② 市町村の課題

- ・地域保健法制定以降、保健所と市町村の役割分担が明確化したことにより、市町村は、保健分野だけでなく、高齢者や障害者等福祉分野など市町村主体の業務が増大し、業務量が多くなり、訪問活動などの地域活動が減少した。
- ・保健師を分散配置している市町村が増え、それぞれ少人数で活動しているため、日々の業務に追われ、保健師同士の情報交換する機会が減った。
- ・小規模な市町村においては少人数で、保健福祉等すべての業務に携わっており、日々の業務に追われているため、自分の活動を振り返る機会が減った。

### ③ 新任期保健師の課題

- ・市町村においては分散配置が増え、先輩保健師の活動をみる機会が減ったため、自分が保健師としてどのような仕事をしていくのかを先輩を見て学ぶにくい。
- ・県においては、個別支援の対応の機会が少ない部署への配置があり、個別支援を経験できない保健師がいるため、県民へ責任ある対応ができる基礎的専門能力が身につけにくい。

### ④ 中堅期保健師の課題

- ・中堅期の保健師は、産休や育休を取得することが多く、プリセプターの経験が少ないため、ともに育ち合うことができない。
- ・日々の業務に追われ、事業にかかる背景や根拠、地域の課題等について伝えにくいため、新任保健師に保健師の専門能力の伝承がしにくい。

### ⑤ 管理期保健師の課題

- ・リーダーシップを執るという自覚や意識を持つ期間が短く、管理期の立場としての視野や視点を持ち、理解して物事を伝えにくい。
- ・計画、立案、評価、施策化などに携わる役割をになう経験を体系的に積み上げられていないため、自分のキャリアデザインが描きにくい。